

アイヌ生活文化再現マニュアル



財団法人 アイヌ文化振興・研究推進機構

アイヌ生活文化再現マニュアル

川 漁

—サケ・ヤマメ・シシャモ—

発刊にあたって

財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構は、平成9年7月の設立以来、アイヌ文化の振興、アイヌの伝統やアイヌ文化に関する知識の普及と啓発、アイヌ文化等に関する研究の推進や助成などの各種事業を実施しております。

そうした事業の一環である「アイヌ生活文化再現マニュアル作成事業」は、アイヌの伝統文化を、映像や音声、文字などによって記録し、アイヌの人々をはじめとして、広く一般の人々や研究者の利用に供することにより、アイヌ文化の伝承・保存を図ることを目的としています。

本マニュアルがより多くの人々の利用に供され、アイヌ文化の振興が推進されるとともに、我が国の多様な文化の一層の発展が図られれば幸いです。

目 次

はじめに

～マレブ～

部位名称・サイズ・しくみ	9
サケのはなし	10
台木をつくる	11
鉄の部分进行加工する	15
鉄の部分にひもをつける	20
柄につける	23

～うけ（ラウオマブ）～

部位名称・サイズ	25
入り口部分をつくる	27
サケの取り出し口をつくる	30
舌をつくる	32
川に設置する	33
うけでサケを捕る	35

保存食：アタツをつくる（平取町）	36
夜の漁：たいまつをつくる（平取町）	36

～小弓とへら矢（シノッポンクとペラアイ）～

部位名称・サイズ	39
小弓をつくる	40
矢柄をつくる	42
へら矢をつくる	43

～タモ～

部位名称・サイズ・材料	48
タモの輪郭をつくる	50
網をつける	52
シシャモを捕る	54
その他の漁具	58
おわりに	60
参考文献	60
川漁の道具類を展示・収蔵している施設	61

はじめに

山で狩りをし、山菜を採り、川で魚を捕っていたアイヌは、食料の得やすい場所、特に川の近くにコタンを作っていました。大きな川のそばや、海に注ぐ河口近くの小高いところに数戸、あるいは十数戸からなるコタンが点在していました。コタンのある所は、川が豊かである証でもありました。それぞれのコタンでは、狩りをする山、サケや小魚を捕る川などが決まっていました。そして互いにその領域を守り、必要な分だけをとっていました。夏のマス、秋のサケ漁の他にウグイ類、アメマス、イトウ、シシャモ、ヤツメウナギなどが川漁の主なものでした。

このマニュアルではアイヌの川漁に着目し、千歳・平取・上士幌・門別で、実際に使われていたアイヌの漁具4点を再現します。



千歳 マレツ



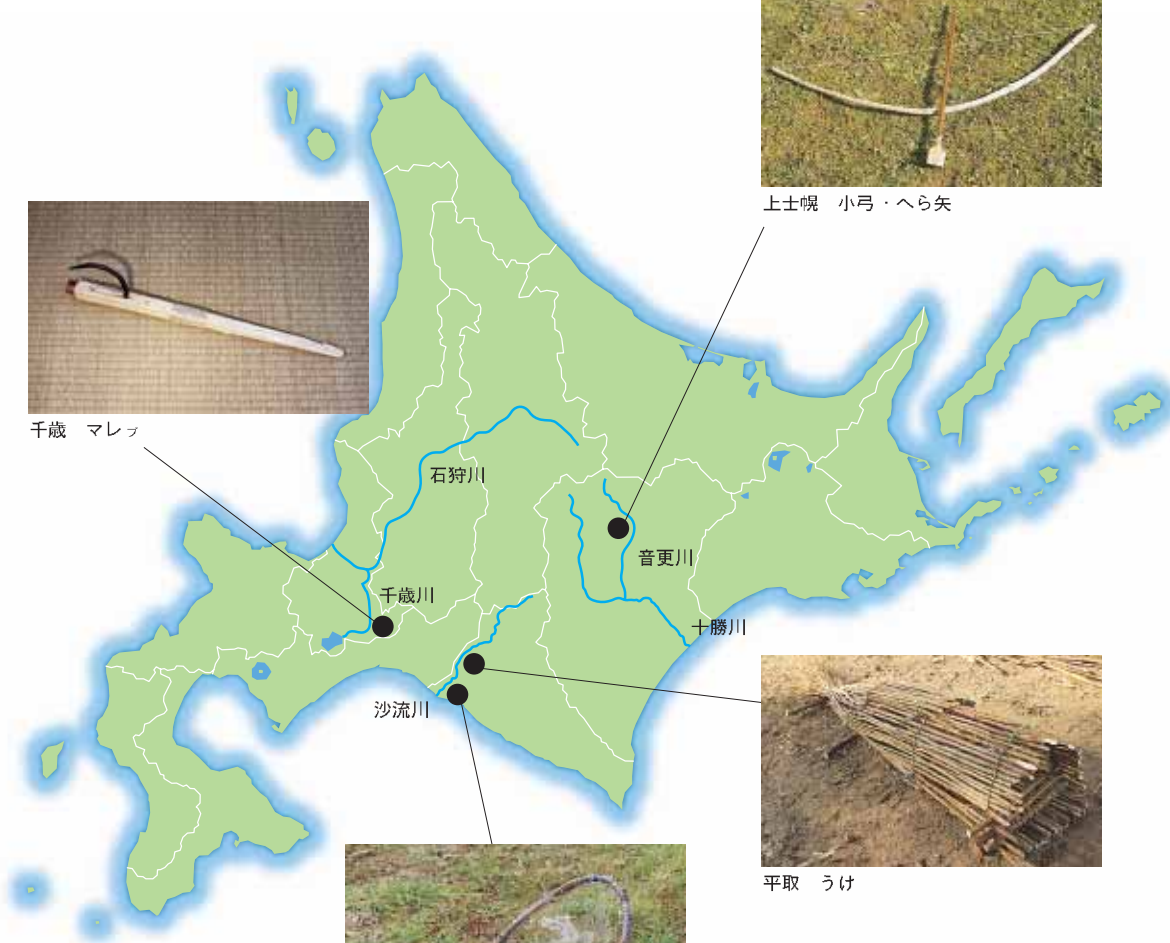
上士幌 小弓・へら矢



平取 うけ



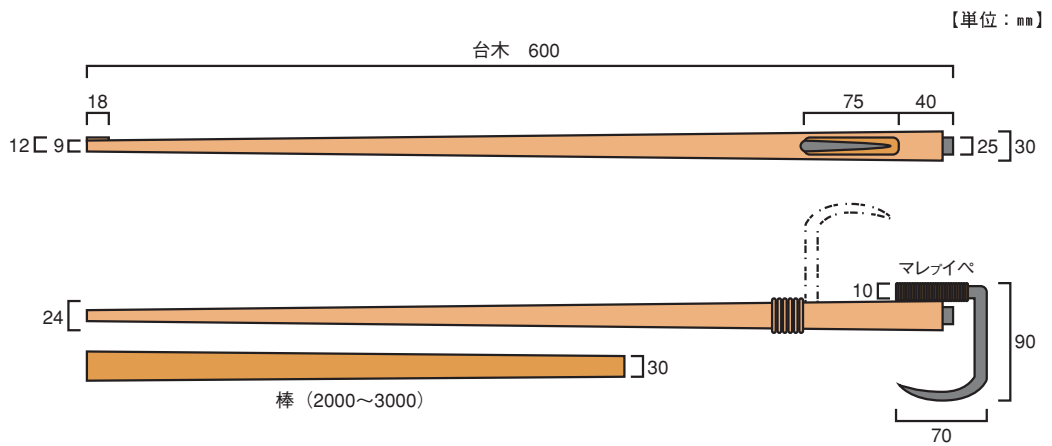
門別 タモ



マレプ

部位名称・サイズ・しくみ

マレプは、サケをとる時に使うアイヌの代表的な漁具のひとつです。魚に刺さる鉄の部分（マレプイベ）、それをとり付ける台木、そして実際に使う時に台木をしぼりつける柄の三つの部分からなっています。



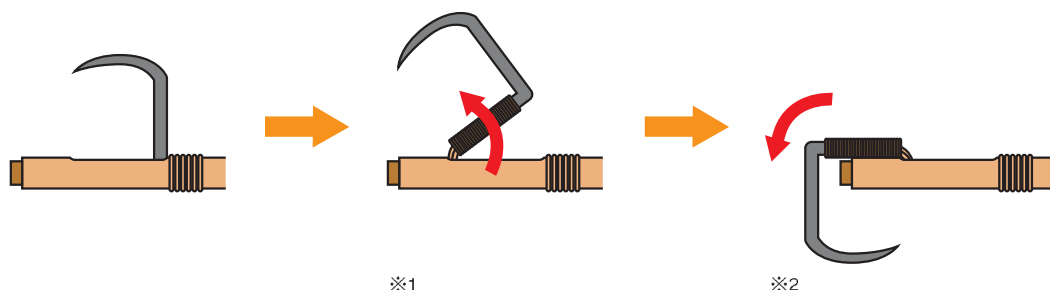
頭の部分やしっぽなどを狙います



※昔は作業着で漁をしていました

台木の先がサケにあたっ^{※1}瞬間、川の方に向かっていて鉄の部分がその勢いで台木から離れて回転し、サケを捕らえます。引き上げる時には鉄の部分が食^{※2}い込み、鉄の部分は手前を向いた状態になり、サケを確実に引き上げる事ができます。

鉄の部分は、先端がサケに刺さる時は「鉋」であり引き上げるときは「鉤」の役目になります。



サケのはなし

儀式：アシリチェプノミ（千歳市）

サケはアイヌにとって主食であり、皮も身も捨てることなく、川で捕れる魚の中で最も重要なものでした。アイヌはサケを「神の魚」として大切にしました。秋には、最初に上ってくるサケを新しいサケとして迎え、神々に感謝し豊漁を願う祭りを行うのを、習わしとしていました。

千歳市では毎年9月に、北海道ウタリ協会千歳支部が中心となって新しいサケを迎える儀式「アシリチェプノミ」を行っています。

儀式では昔と同じように丸木舟に乗り、舟の頭の方に乗る人がマレブでサケを捕ります。捕ったサケから、祭主が心臓を取りだし串にさし、火の神に捧げます。サケは祭壇に供え、豊漁を神に祈ります。

マレブ マ：泳ぐ レ：させる プ：もの
(千歳地方では、マレクと呼ばれている)



台木をつくる

【材料】

カタスギ

○台木用：直径7 cm
長さ60cm

○柄 用：直径3 cm
長さ2 m

カタスギ…バラ科。日本、朝鮮、中国に分布する。淡紅色。組織は均齊でやや重く硬い。材木膚に白い斑点があります。



サケが雄であれば、白子を取り出し心臓の横に並べます

台木用のカタスギは、その日のうちに皮をむき、1週間ほど自然乾燥させます。



ナタを使って、3 cmほどの角材になるよう削って行きます。

棒と合わせる方の幅を少し細くします。



銅のカンに合わせ、木の角を落としながら削ります。

○銅のカン 縦2.5cm×直径2.5cm



台木の先端に銅のカンをはめます。



金槌で打ち込みます。



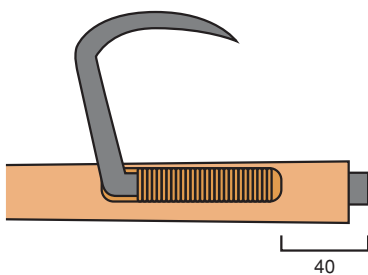
千歳地方に残っているマレブは、補強のためにカンをはめたり、針金をまきつけてあります。こうする事で勢いあまって川底の石を突いた時、木が割れる心配がありません。

台木と棒を合わせる時に使う紐が固定しやすいよう、下から5 cmの所を削って溝にします。

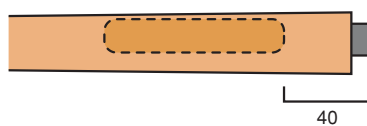
溝の先も棒と合わせやすいよう薄くします。



台木の先から 4 cm ほどのところに鉄の部分を置き、寸法をとります。



【単位：mm】



印をつけた内側を、深さ 1 cm になるまで彫ります。この溝は、マレブの舟・マレブチブと呼ばれています。ひもを巻いた鉄の部分がおさまる所です。

溝の上の部分に、1 cm の穴をあけます。昔は、焼き火箸などを使ってあけました。



台木の完成です。



鉄の部分を加工する

最初にマレブの鉄の部分（鉤・鋸両方の役割を果たす部分）を加工します。

【材料】

- カタスギ
- 鉄の棒
- 綿のひも（太・細）
- 麻ひも
- 銅のカン



鉄は和人との交易で得ていましたが、古くは「和船」の船釘を材料として使っていました。

鉄の部分の加工は、炭火を使って赤くなるまで熱する事から始めます。

赤くなった状態のものを何度も何度も金槌でたたき、形を整えていきます。

魚にささる先の部分は、鉄をまわしながらたたいて尖らせ、形を整えます。



熱くする



たたく



さます



作業の繰り返しで片方は尖らせ、もう一方を平たい状態にします。

鉄の棒を3等分し、尖らせた方から3分の2のところ
に印をつけます。



反対側は、ひもを巻く部分になるので平たくなる
ようたたき5mmの厚さにします。



5mmの厚さになるまで平たくたたきます

印をつけた所を直角に曲げます。
平たくしたところが、台木の溝におさまる部分
になります。

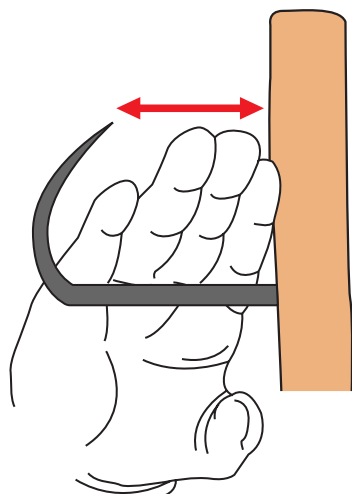


魚にささる、尖った部分を曲げて行きます。

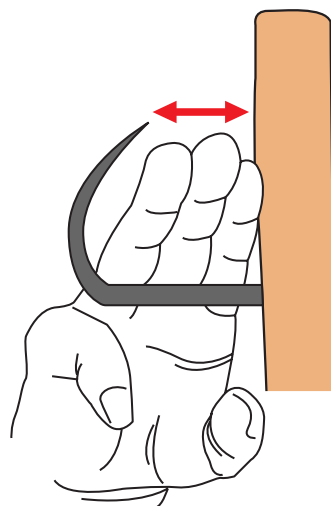


曲がりの部分は指4本の幅を目安に、浅く曲げたものをサケ用、指3本を目安に、深く曲げたものはマス用に適していると言われています。

「かえし」をつける事がほとんどないというのも、特徴のひとつです。



サケ用



マス用

今回は、サケ用に仕上げました。

鉄の部分にひもをつける

鉄の部分を、台木につけるひもの長さを決めます。

ひもは輪にして40cmです。

先端をひとまとめに結んでおきます。

昔は、鹿の皮を細くさいたものをひもとして使いました。



ひもの長さ 80cm



輪の方を足の指にかけ引っ張りながら作業します



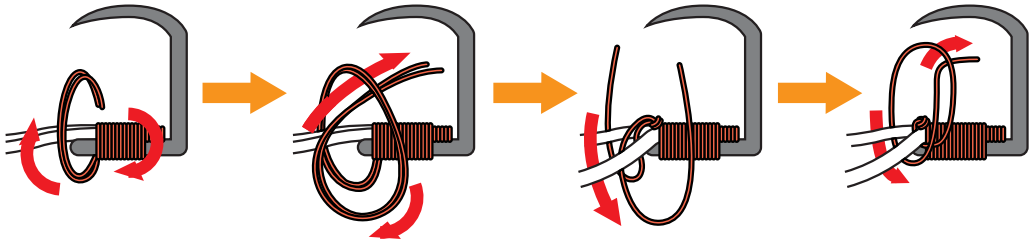
結んだ先を鉄の直角の部分にあてます

平たくした鉄の先端は、輪の方向に向けます。

ひもを上置き、角から隙間ができないよう先まで綿の糸を巻きます。均一に巻くことで、台木につけた時おさまりが良くなります。

綿の糸は、水中で少しふくらむのでその事をふまえ、細い糸を使います。

昔は、シナの木の皮で作った糸を使いました。



最後に、綿の糸を片方ずつ太い紐に結んで、切り落とします。

台木の溝に入る部分に、糸が巻かれた事になります。



鉄の部分の根元から出ているひもを、穴から引き出します。



溝の下 8 cm の所から麻ひもを巻きます。鉄の部分についているひもがゆるまないよう何度も引きながら固定して行きます。

ひもをしっかり固定する事で鉄の部分がぶれず、水中で魚を逃しません。

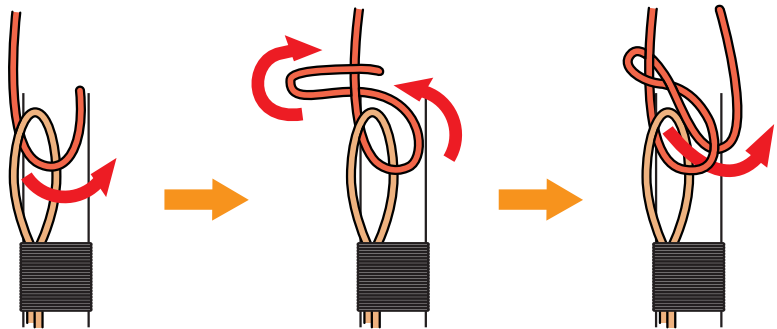
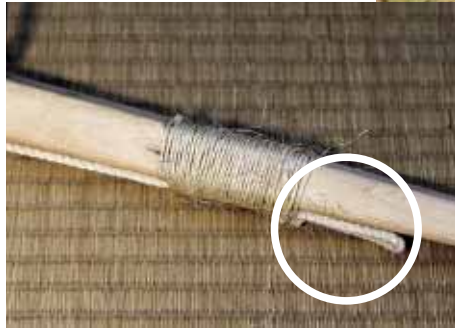


台木に鉄の部分をつけ「マレブ」が完成しました。

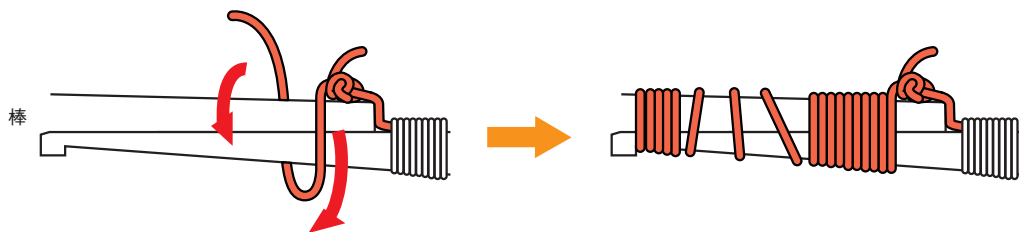


柄につける

柄にする木は、川幅が広い時は長い棒、狭い時は短い棒をその場で用意したと言われています。ヤナギやヤチダモが使われていました。



麻ひもで巻き残した輪の部分に、別のひもを結びます。



巻き始めは、ひもの結び目・台木・棒を、押さえるようにしてしばり、棒の先を台木から出ているひもに押し付けるようにして、巻いて行きます。

台木と合わせる棒の部分も、削り落として平らにします。ひもは、台木を作る時にあらかじめ付けておいた、先端のみぞまで巻いてしばります。



捕れたサケの頭は、ヤナギで作った魚叩棒（イサパキッニ）で2・3回たたきます。こうする事で、サケがイサパキッニをおみやげとして口にくわえて神の国へ帰ると伝えられています。



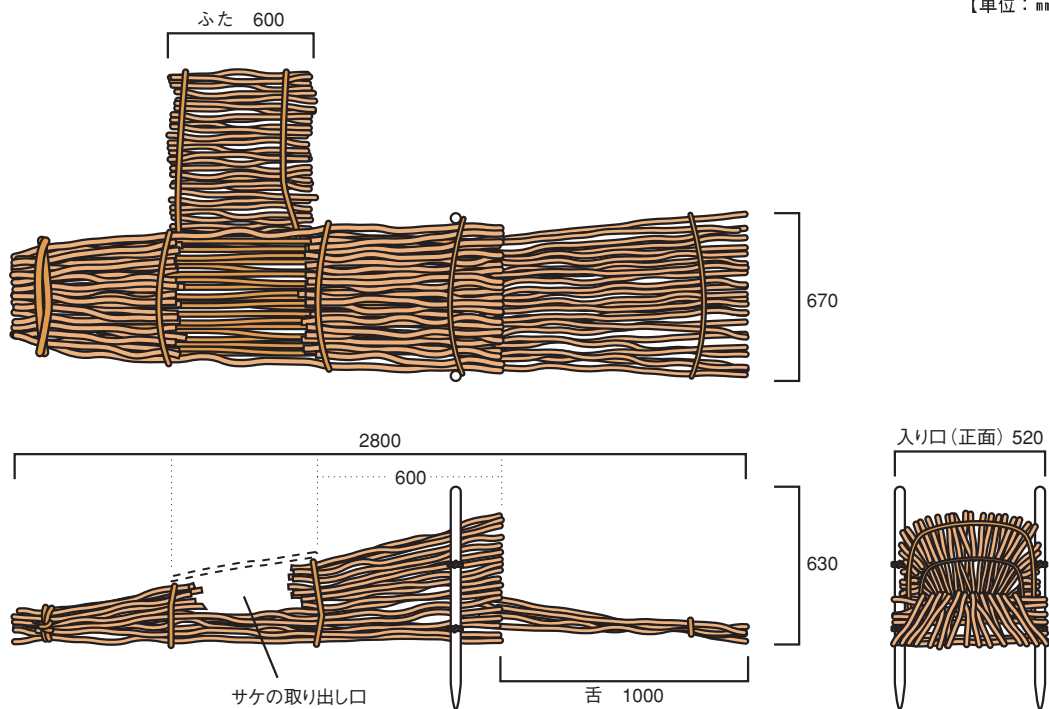
川幅の広いところで漁をする時、千歳では丸木舟を使っていました。

また浅瀬でも、同じようにマレブを使ってサケを捕りました。大群をなして浅瀬を上って行くサケは魚体も大きく、比較的捕るのは簡単だったようです。しかし、1匹ずつしか捕る事ができないマレブは必要な分だけ捕るというアイヌの考えをそのまま反映させた漁具です。

うけ (ラウオマップ)

部位名称・サイズ

【単位：mm】



うけは、川幅が狭い支流などでサケを捕る時に使う漁具です。
ここでは、平取町のアベツ川支流で再現した「うけ」を紹介します。

【材料】

- ヤナギ 300本
- ぶどうづる
- ひも（昔はシナ縄）



材料は、加工しやすく手に入りやすいヤナギです。
うけづくりでは、太いものや背丈のあるもの、葉のついたものなどそれぞれの特徴を、生かせる部分に使用します。

入り口部分をつくる

うけは、漁をする川の近くで作ります。

入り口となる輪郭はぶどうづるとヤナギで作ります。口の幅は60cm。底になる部分にヤナギを使います。



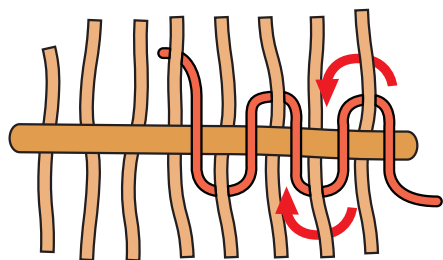
入り口の下になる部分にヤナギを並べてしばり、底を作ります。



前から



後ろから

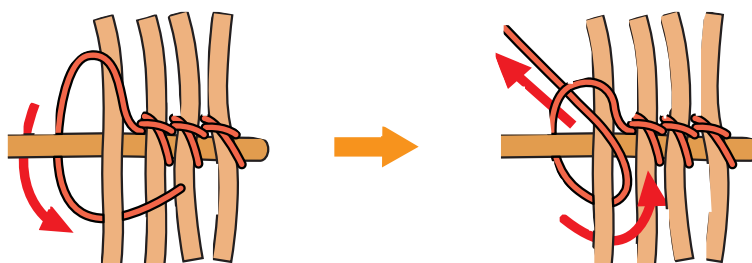


○太さ 4 cm のヤナギ×13本

底の部分ができたら、下から2本のヤナギを入口部分に加えます。



ぶどうづるのアーチにそって、下からヤナギをひもで編み上げ、うけ本体を作っていきます。



入り口から60cmほどの間隔で、入り口よりも小さなアーチを2カ所に入れます。2つ入れる事で、魚が入る空間ができます。



2カ所とも、入り口と同じひも使いで編みます。編み終わりのひもは、ひとつにまとめてしばります。



ヤナギ 2 m × 53本

うけの底を作っているヤナギを、長さを15cmほどに切りそろえます。



ヤナギの先はひとつにまとめ、ひもで縛ります。



サケの取り出し口をつくる

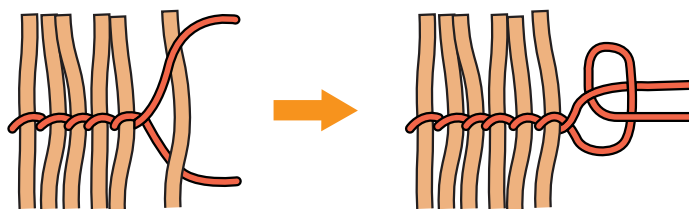
2つめの輪と3つめ輪の間を切り落とし、魚の取り出し口をつくります。



取り出し口にあわせる「ふた」を作ります。
60cmほどに切ったヤナギを上下2カ所、同じように編みます。



交差させたひもの間に、ヤナギを1本ずつ入れて行くというひも使いです。



編み終えたひもは、長いままにしておきます。



完成した「ふた」をつけます。



ヤナギとヤナギの隙間にひもを通して、片側はしっかり結びます。
もう片方の、切らずにおいたひもを使い、ふたを開けやすいように結びます。



ふたをつけた「うけ」の完成です。



長さ180cm・高さ50cm

舌をつくる

舌は、川に設置した時、サケが本体に入りやすい傾斜となり、かえしの役割にもなります。

長さ1 m程のヤナギの先を20cmほど削って尖らせ、ふたと同じように編み、板状にします。



先を削り、裾が扇形になる事で、入り口の幅に合わせる事ができます。

川に設置する

うけを固定するために使う杭は、直径10cmほどの太いやなぎです。

川底に打ち込むため、先を削っておきます。



長さ1 m

うけは、川下に入り口をむけ、川のほぼ中央になるように置きます。



入り口部分の両側2カ所から杭を打ち、1 m程の間隔で「ハ」の字になるように固定します。



先端に石を置いて、浮きあがらないようにします。



杭と杭の間には、葉のついた細めのヤナギをからめて行きます。
水面より少し高くなるまでヤナギをからめ、大きな隙間ができないようにします。



入り口に置く舌（板状のもの）にも石をつけ、流されないようにします。



最後に、サケが集まりやすいようヤナギで日陰をつくれます。

川底には、隙間を防ぐための石も置きます。



川下に入り口をむけて設置します

うけでサケを捕る

入り口に置いた舌（板状のもの）は、尖らせた先の部分が、サケの重さで上下し、一度入ると外に出る事はできません。



保存食

アタツをつくる（平取町）

アタツは開いて干したサケのことです。

サケは主食であり、交易品でもあったので、たくさん捕れた時には冬の間の食糧として加工しました。

9月・10月に捕れるサケは、保存用ではありません。必要になった時に漁をして、その日の食事としました。

11月に入ると、ほとんどのサケは産卵を終え、脂も少ないので保存できます。またこの時期は、蠅もいないので蛆がわく心配もありません。アタツをつくるには最適な季節です。

アタツのほかに、三枚におろして干したもの（ミケルイ）、丸干ししたもの（サツチェフ）があります。

夜の漁

たいまつをつくる（平取町）

産卵のため川を上ってきたサケをとる夜の漁には、マカバの皮で作ったたいまつ（チノイエタツ）をいくつも持ち歩きました。

チノイエタツと同じように、萱を束ねたもの（一握り）に火をつけたものも灯りの代用として使われていました。

【材料】

○マカバの皮 幅20cm×長さ60cm（6月に剥いで乾燥させたもの）

火にあぶり、柔らかくなったものを少しねじりながらまるめます。

尻の下にしいてつぶすと扱いやすくなります。

切り込みを入れた枝に、はさんで完成です。



アタツの作り方

●背割りして開く



●背骨をはずす



●小枝を串にして刺す



●雨のあたらない所に
1カ月ほど寒干しする



串として使うのは、臭みのないハギが適していると言われています。

たいまつは、マカバを下に向けると炎が大きくなり上に向けると小さくなります。



たいまつを水面に近づけ、あかりに驚いて動きが止まった瞬間を、マレブで突きます。



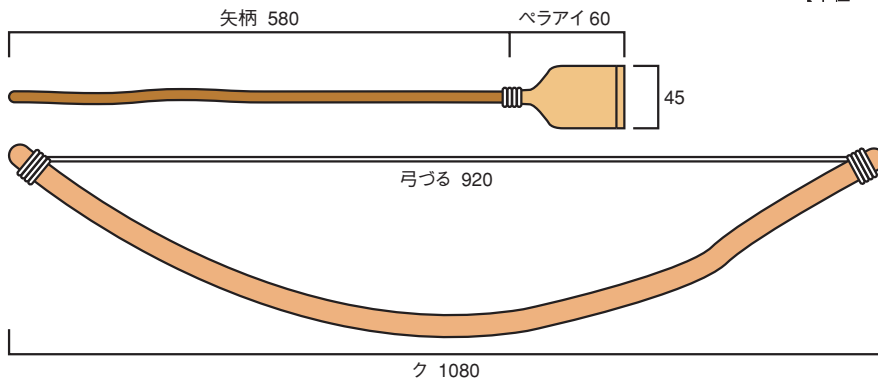
たいまつを持つ人を「あかし持ち」と言います。落ち着きのない人が持つと魚の動きが早くなり、反対に落ち着きのある人が持つと魚の動きが遅くなって、魚が捕れやすいと言い伝えられています。

漁の時には「あかし持ち」を選ぶ事も、重要なポイントでした。

小弓とへら矢 (シノッポンクとペラアイ)

部位名称・サイズ

【単位：mm】



アイヌにとって弓は、狩猟用具として大切なものでした。

必要な時に、その場にあるものを使って弓を作れるよう、魚が捕れるよう技を磨いていました。アイヌの男達は、弓をうまく使いこなす事で、一人前とみなされたのです。子ども達も、父親から与えられた小弓（シノッポンク）で遊びながら技術を身につけました。

ここで紹介する小弓とへら矢は、上士幌町郊外音更川沿いに住む川上英幸さんが再現したものです。



へらの部分は、水面に垂直に構えます



ヤマメなどの小魚を捕りました



小弓をつくる

【材料】

- イチイ（根元から枝分かれましたもの）
120cm×2cm
- 弓づる用の糸



イチイはアイヌ語でクネニといい、弓にする木という意味を持っています。弾力性に富み、加工しやすい木です。

川上さんは柔軟性を重視して、幹から伸びている枝ではなく、根元から枝分かれていますものを材料にしました。



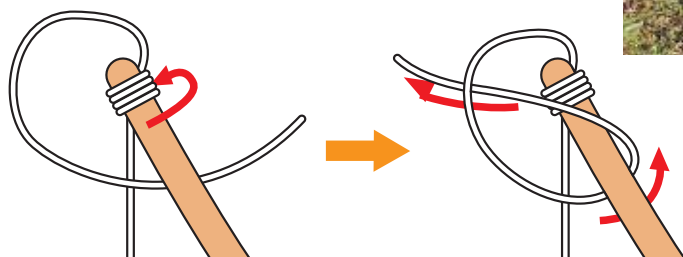
弓となる枝の皮をむきます。

枝のはじから2cmの所に弓づるになる糸を結びます。



弓の大きさよっては、糸の巻き始めの部分を安定させるため切りこみを入れる場合もあります。

片方に糸を結んだあと枝をしならせ、もう一方も同じように糸を結びます。



昔の弓づるの材料はツルウメモドキの皮で作った糸やエゾイラクサの繊維で作った糸でした。

最後に、膝を使って形を整え小弓の完成です。



矢柄をつくる

【材料】

- サビタの新芽（ヨモギも可）
- イチイの幹
- 綿の糸



へらを差し込む部分は、空洞ではなくスポンジ状のものを選びます。

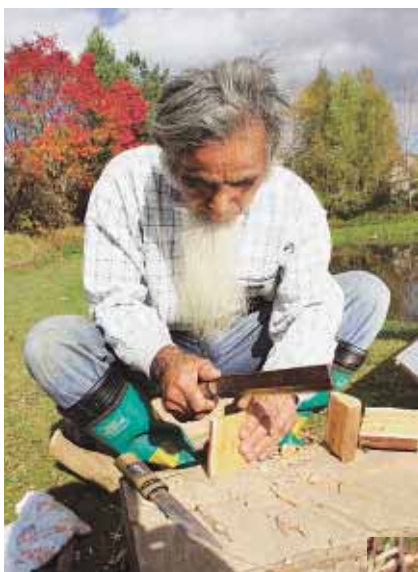
今回は、枝から直角に伸びているサビタの新芽を材料にしました。



切断面

へら矢をつくる

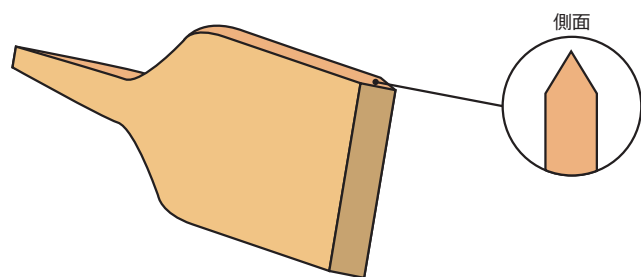
イチイの幹をナタを使って割り、5mmほどの厚さにします。
へらの部分には、イチイの正目を生かします。



矢柄に差し込む部分は、両側から中心に向かって
3 mmほどになるまで削り込みます。

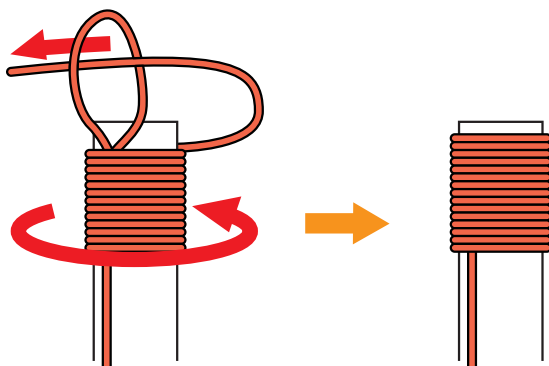


全体のバランスを見ながら削り、薄くします。



矢は、軽く、鋭く、遠くへ飛ばなくてはなりません。
へらの先の部分は、5 mmの幅で、両面から薄く削ります。

へら矢を差込む部分を補強するため、矢柄の一端に、2 cm幅で糸を巻きます。



カンコ結び

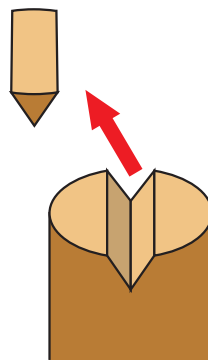
糸で柄の上に輪を作り、輪を押さえるようようにして2 cmほど巻き、巻き終わりの糸を輪に入れ、下に残っていた糸を引き込みます。

輪とともに巻き終わりの糸が中に入るので、ほつれる心配はありません。

サビタのスポンジ状の部分にへら矢を差し込みます。



弓づるにあたる矢柄の先に切りこみを入れます。



イチイとサビタで作った「小弓」と「へら矢」の完成です。



タモ

シシャモはアイヌ語で「スサム」といい、鍋をかけながらでも捕りに行けたという意味を持つほど、アイヌにとって身近な魚でした。

シシャモが捕れるのは八雲の遊楽部川・胆振の鶴川・沙流川・十勝川・釧路川など、太平洋岸の内浦湾から釧路海岸までの特定の川です。沙流川河口にある門別町富川地区も、かつてはシシャモ漁でにぎわった地域です。

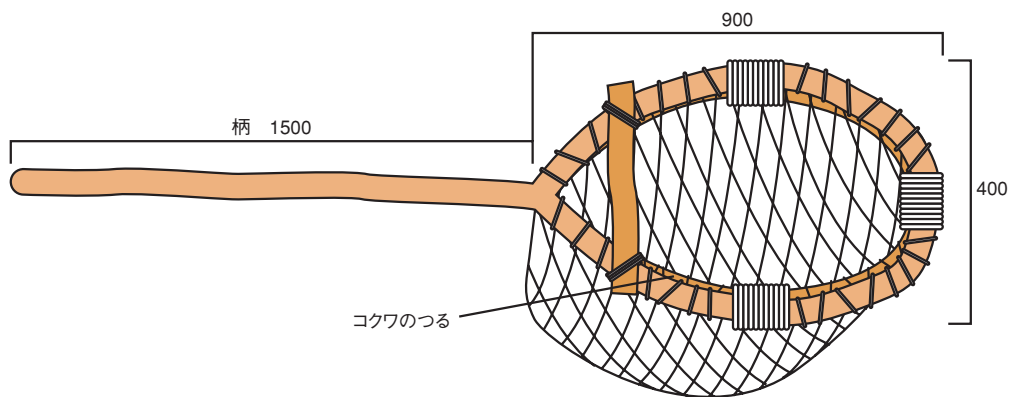


シシャモのメスは夜のうちに産卵を終え、明け方には川を下ります。オスは、メスの産卵後も数日間は川にとどまります。このような習性から限られた時間で、手早く大量に捕る方法として「タモ」や川をせき止めて使う「築」が作られました。

ここでは、ウタリ協会門別支部のみなさんが作ったタモを紹介します。

部位名称・サイズ・材料

【単位：mm】



タモづくりにふさわしい木は、アオダモと言われていますが、今回は、日高地方に多く見られる「サワシバ」を材料にしました。



【材料】

- サワシバ（太さ 3 cm）
- コクワのつる
- 網（ナイロン製）
- ひもはシナの木の子で作った糸（イテセカ）



枝が二股に分れているものを材料にします。柄になる部分は1.5mです。



タモの輪郭をつくる

囲炉裏の熱を利用して、輪郭となる部分の枝を暖めます。



自由に曲げられるほど柔らかくなったら、木などのまるみを使って形を整え、仮止めをします。



仮止めの段階で網をつける部分の大きさが決まります



枝が冷え、形が安定したら仮止めの紐をはずし、枝の合わせ部分に、シナの木の皮で作った糸（イテセカ）を巻いて固定します。



網をつける

輪の部分に網をぬいつけます。

今回は、現在漁で使っているものと同じ網を使いました。



網を綿の糸で数カ所止めたあと枝にからめて行きます。



網をつけた枝の下にコクワのつるを固定します。



枝、網、つるの3つを、ヤナギの皮（薄く剥いだもの）を使って補強します。

乾燥と同時に、ヤナギも乾いて硬くなり巻いた部分が縮まります。



漁をしている時にタモが壊れても、川の近くに豊富にあるヤナギを使ってその場で補修する事ができました。

二股に分かれた枝の部分を補強します。

幅に合わせて切ったサワシバの枝に切りこみを入れ、タモの表（おもて）面に載せ、ひもで固定します。



網は、適当な長さで切り落とし、はじの部分と底を縫いあわせて完成です。



シシャモを捕る

シシャモが遡上する11月には強く冷たい風が吹き、みぞれまじりになる事もしばしばです。門別町周辺の地域では、「シシャモ荒れ」と呼んでいます。また古くは、神がシシャモをつれて来た合図として河口付近で何度も、雷（スサメトラップ）が鳴り響くと伝えられています。



シシャモの卵を狙って集まる海鳥も漁の目印です



シシャモが遡上する期間は短いので、川のそばに小屋を作り夜遅くまで漁をしました。



シシャモ小屋

骨組みはヤナギです。全体をむしろで囲い、合わせ部分が開かないようにし合わせ茅をかぶせたものです。風をよけるのには充分暖かいものですが、中央には囲炉裏も作りました。

シシャモは、河口から10km以内の場所で産卵すると言われています。

川岸だけでなく、川の中に入って捕ることもありました。



タモで同じ場所を何度もさらっていくうちに、川底に窪みができます。

その窪みに、産卵のために集まって来るシシャモをすくい上げます。



捕れたシシャモを運ぶのは女達の仕事でした。



たくさん捕れた時には、雪を利用して1タモごと凍らせたり、干して保存しました。

アイヌ語で、シシャモの上に降った雪をトルルカラリブ、すだれに干したシシャモの上に降った雪をサンカラリブといいます。この言葉からも、シシャモが寒い季節の食べ物であり、シシャモのある景色が冬の風物詩だったことがわかります。



その他の漁具

魚とり鉤（アプ）

流し鉤ともいわれるもので、主に産卵のために川にのぼってくるサケを捕るのに使われました。

【材料と作り方】

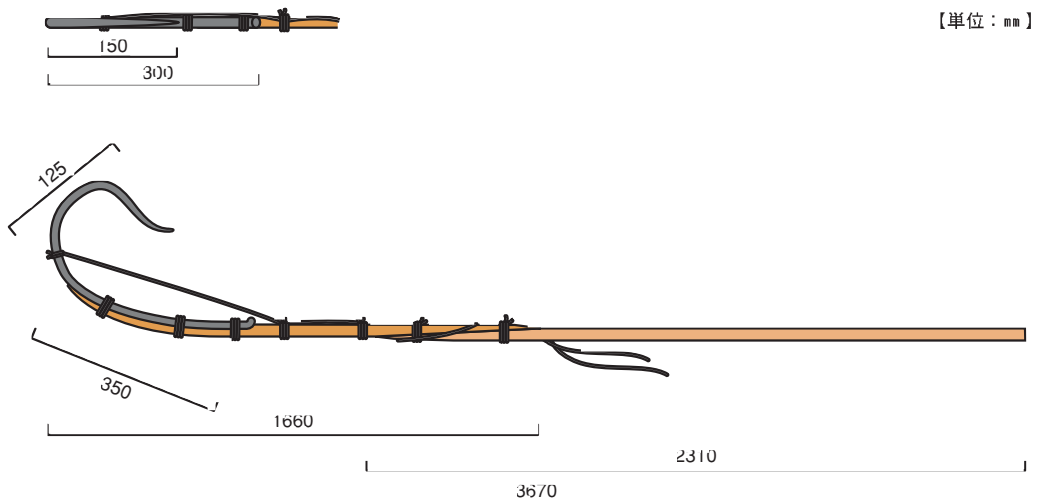
ヤチダモを火にあぶって、鉤の部分にぴったりと合うよう固定します。鉤の内側に、棒から1 cmほど離して手元まで綿糸を張ります。

柄には、削りやすく、狂いの出ないシウリの木を割り取りしたものを使いました。

【使い方】

鉤を上向きにして川の流れにそって流し、張ってある糸に魚の腹ビレが触れた瞬間、柄を手前にひいて魚をひっかけます。

暗いところや、水の中がよく見えない時に使われました。



すくい網 (ヤシヤ)

すくい網は、丸木舟を使って、主に夜の漁で使われました。

【材料と作り方】

昔は、ツルウメモドキの皮から作った糸で、12cmほどの目に編みました。

網の上下に縄を通し、両側を2本の棒にそれぞれ結びつけます。棒の上の部分につく縄は、網の幅の2倍です。

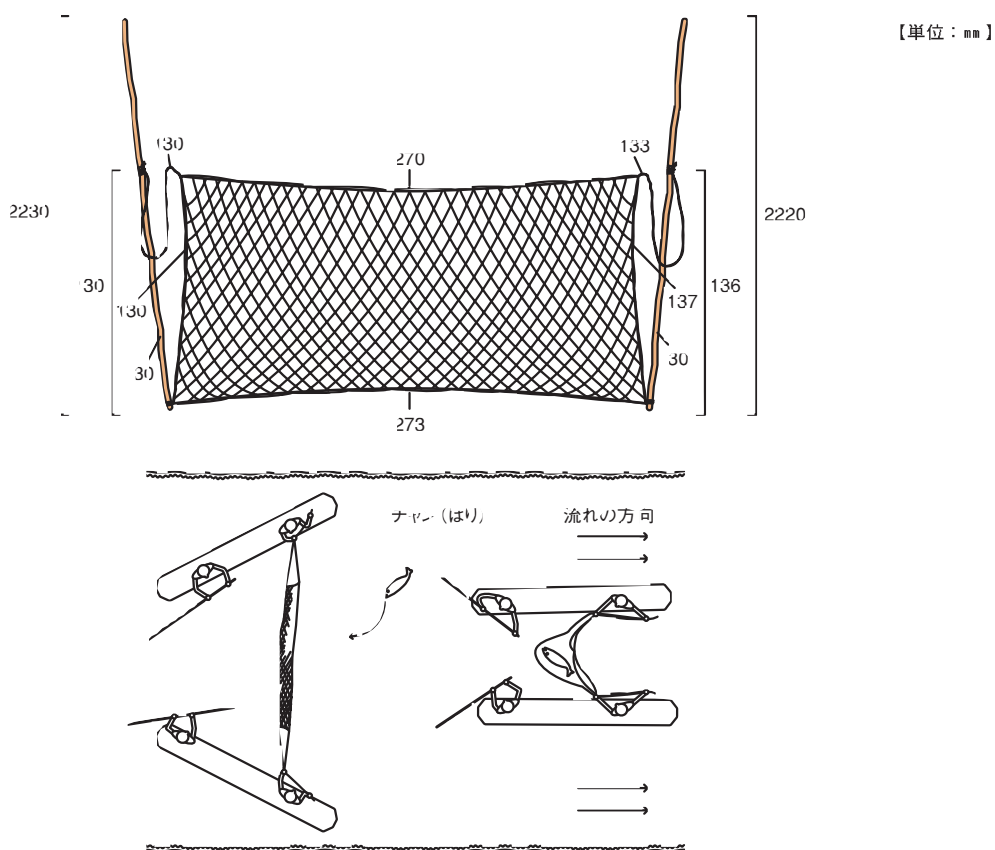
網の下部分は、直接棒につけます。

【使い方】

舟と舟の間を八の字に3.6mほどに保ち、川下へ流します。

網持ちは柄を斜めに水中につっこんで網を広げ、真中に魚が集まったところで舟を近づけます。

網持ちは、縄とともに柄をしごいて網の口をふさぎ、魚が逃げないようにして捕ります。



おわりに

アイヌは生活するために必要な、いろいろな道具をつくりました。

彫る、削るといった技術を駆使した漁具づくりは、男の仕事でした。

このマニュアルでは、アイヌの代表的な漁具を再現し、特別採捕の許可を得て実際に漁を行いました。材料・寸法・作業の順番などは、現在地域に残っている方法に基づいて行われたものです。

昔もそうであったように、この材料でなければならない…、この方法でなければいけないというものではなく、自然の持つすばらしさと人間の知恵を、随所に生かして行くという作業となりました。

サケ捕りに行く時、アイヌ語では「^魚チエプ ^{いじめる}コイキ ^{ため}クス ^行アラパ ^まアンロー」と声をかけ合ったといいます。

この言葉の中には「魚をいただきます。いじめてごめんなさい」という気持ちがこめられています。

実際に行った漁でも、再現した漁具を通して、謙虚な気持ちで自然の恵みをいただいていたアイヌの人々の思いを知る事ができました。

参 考 文 献

川漁の道具の制作にあたって、参考となる文献をいくつか紹介します。

- 萱野 茂
1978：「アイヌの民具」すずさわ書店
- 萱野 茂
2000：「アイヌ歳時記」平凡社
- 中川 裕
1990：「アイヌ無形文化伝承保存会 アイヌ文化第15号」
- 出利葉浩司
1990：「北海道開拓記念館調査報告・第29号」
- 出利葉浩司
1993：「北海道開拓記念館調査報告・第32号」
- 鯨島惇一郎
1986：「北海道の樹木」北海道新聞社

川漁の道具類を展示・収蔵している施設

川漁の道具を展示、あるいは収蔵している施設をいくつか紹介します。

北海道内

- | | |
|---------------------|---------------|
| ●アイヌ民族博物館 | 白老町若草町2-3-4 |
| ●アイヌ文化振興・研究推進機構 | 札幌市中央区北1条西7丁目 |
| ●旭川市博物館 | 旭川市神楽3条7丁目 |
| ●網走市立郷土博物館 | 網走市桂町1-1-3 |
| ●浦河町立郷土博物館 | 浦河町字西幌別273 |
| ●帯広百年記念館 | 帯広市緑が丘2 |
| ●萱野茂二風谷アイヌ資料館 | 平取町字二風谷 |
| ●川村カ子トアイヌ記念館 | 旭川市北門町11丁目 |
| ●静内町アイヌ民族資料館 | 静内町真歌 |
| ●標津町歴史民俗資料館 | 標津町字伊茶仁278 |
| ●弟子屈町屈斜路コタンアイヌ民俗資料館 | 弟子屈町字弟子屈276-1 |
| ●苫小牧市博物館 | 苫小牧市末広町3-9-7 |
| ●名寄市北国博物館 | 名寄市緑丘222 |
| ●函館市北方民族資料館 | 函館市末広町 |
| ●美幌博物館 | 美幌町字美禽253-4 |
| ●平取町立二風谷アイヌ文化博物館 | 平取町字二風谷 |
| ●北海道大学農学部附属博物館 | 札幌市中央区北3条西8丁目 |
| ●北海道開拓記念館 | 札幌市厚別区厚別町小野幌 |
| ●北海道立アイヌ総合センター | 札幌市中央区北2条西7丁目 |
| ●北海道立北方民族博物館 | 網走市字塩見313-1 |
| ●幕別町蝦夷文化考古館 | 幕別町千住114-1 |
| ●室蘭市民俗資料館 | 室蘭市陣屋町2-4-25 |

北海道外

- | | |
|------------------|------------------|
| ●稽古館 | 青森市大字浜田玉川207-1 |
| ●東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館 | 仙台市青葉区国見1-8-1 |
| ●東京国立博物館 | 東京都台東区上野公園13-9 |
| ●アイヌ文化交流センター | 東京都中央区八重洲2丁目4-13 |
| ●国立民族学博物館 | 吹田市千里万博公園10-1 |
| ●大阪府立近つ飛鳥博物館 | 大阪府河内郡河南町大字東山299 |
| ●大阪人権博物館 | 大阪市浪速区浪速西3-6-36 |
| ●天理大学付属天理参考館 | 天理市布留町1 |
| ●松浦武四郎記念館 | 三重県三雲町大字小野江383 |

アイヌ生活文化再現マニュアル
川 漁 —サケ・ヤマメ・シシャモ—

2005年3月 発行

発行 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構

〒060-0001

北海道札幌市中央区北1条西7丁目

プレスト1・7 (7階)

TEL (011) 271-4171 / FAX (011) 271-4181

監修 萱野 茂

本書の内容の一部または全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で禁止されていますので、あらかじめ財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構あてに許諾をお求めください。

